・地域の妃廟で竈神の見送りをする人々

ケット氏は儀礼を 23 日の午後に行っているが、23 日 0 時、日付が変わるとすぐに儀礼をする人も多い。大勢の人々が竈神に願い事をして天に上がるので天では混雑する。少しでも早く儀礼をして、竈神を早く天に上げて自分たちの願いを叶えてもらいたいという思いがあるという。0 時過ぎ、家で儀礼を済ませた人々が近くの庵にある大きな木の下で神像の見送りをする（写真 3-10）。女性や夫婦が訪れ、小型の神像を置き線香を供え、紙銭や版画に火をつけて燃やし、祈願をする姿がみられる。なかには大きな北部地域の立体的なマーを持っている人もいるが、稀である。

昼に同じ場所を見に行くと、神像が山積みにされていた。多くは小型の神像だが、煤などが付着していないきれいな土製支脚が神体としてわずかに置かれている。このような見送りされた神像はフエ地域の至るところにあるがどのように片付けられるのかは聞き取りのなかでは誰も知らなかった。半年後も同じ状況で神像が置かれていた。その後は未調査であり現時点では神像の行方は未詳である。

写真 3-10 妃廟での竈神見送り
23 日 0 時過ぎ（上）昼（下）

（3）家屋と台所と竈神の方位

キン族の家屋と竈については、第 1 章で触れているように、ピエール・グルーがトンキンは主屋に対する台所の位置がさまざまであるのに対してアンナンでは台所は常に家屋の左側に位置する（家屋に背を向けて）」と記している。

前述したようにフエ王宮の配置計画には、儒教や陰陽思想の影響がみられるが、フエ地域の民間の家屋や台所に関する配置や方位について言及した資料は見当たらない。しかし、フエ地域の人々にとっては台所と竈神を祀る方位は重要であり、またフエ地域の伝統的な家屋には配置に特徴がみられる。これまで、伝統的住居の建築学的研究は詳細に行なわれているが、そのなかで空間の配置についてはほとんど調査がされていない。ここでは、調査からフエ地域の家屋における台所と竈神の祭壇の配置を少しみていきたい。その際に、2008 年に国の史跡に指定されたフォックティック村では伝統的家屋建築に関する調査が行なわれているため、その配置図を引用し[26]、対応させながらみていきたい。

[26] 奈良文化財研究所 2011『ベトナム社会主義共和国　トゥアティエン・フエ省フォックティック村集落調査報告書』、昭和女子大学国際文化研究所紀要 2011『ベトナム社会主義共和国　トゥアティエン・フエ省フォックティック村集落調査報告書』、同じ内容の報告書であり、今回は手元にある奈良文化財研究所の資料を引用する。

①台所と竈神の祭壇の空間配置

・基本的な空間配置

基本的な伝統的フエ地域の家屋は平屋造りで主屋の間口３間×奥行き１間である。農村にあるケット氏の家屋も周辺の家もこの造りを基本としている。そのため、ケット氏の家屋を例としてみていく。

敷地は生垣で囲まれている。門の先には、障壁（ヒンプン）が建てられている。この障壁は、フエ地域の民家では一般的で農村でもみられる。ケット氏の家は生垣の障壁が建てられている。その先に主屋があり、主屋の中央では祖先の祭壇や観音が祀られた祭壇が置かれている。主屋から見て左に付属屋が建てられている（図 3-1、写真 3-11）。

図 3-1 ケット氏の家の間取り

フエ地域の家屋で重要なのは方位であるが、この方位はケット氏によると実際の自然方位ではなく、図に加えたように、主屋を北として門を南とみる方位である。表に示したフォックティイック村の家屋もこの民俗方位[27]に基づいていることがわかる。その場合、主屋の西側の脇室は特に主人の空間であり男性の空間である。そして、東側に建てられた付属屋は生活、台所などが設置される女性の空間であるという。

写真 3-11 ケット氏の家屋
正面 門と障壁（左）　　主屋と付属屋の外観（右）

[27] 自然方位と民俗方位の用語は『沖縄民俗辞典』の方位観の項で説明されている、「方位には、磁石で計ることで決定される自然方位とは異なり、地元では独自の自然認識に基づく民俗方位」（鈴木正崇 2008：461）に依拠してこれらの用語を用いる。この方位観は中国の影響によるものであろう。

・フォックティック村の家屋

フォックティック村の３軒の家屋を事例としてみていきたい（図 3-2）。家屋の配置と間取りは、他の家もほぼ同様である。民俗方位からみると付属屋は主屋の東側に建てられ、そこに台所が置かれている。竈神の祭壇は、もともと炉が作られ煮炊きをしていた場所の壁の上部に設置されている。図 3-2 の①と②では、竈神の祭壇が置かれた場所とは別に炉が作られているのがわかる。しかし、この炉は台所を新しく作り直してガスコンロを置いたあとに新たに作った炉である。現在でもガスコンロと炉の併用は、農村などでは珍しくない。強い火力を必要とするときや長時間煮炊きをするときなどは、薪を燃料にして炉に置かれた五徳を使っている。

竈神を祀る方位であるが、前述したダオ氏の家では、家主であった自分の父親が占い師にみてもらい、「東東北」に祀ることになったのである。図 3-2①は、ダオ氏の家屋の配置図と間取りである。付属屋は民俗方位の東に建てられている。現在の付属屋は、後からトイレや炉の部分が増築されたのだが、そのことは配置図からみても確認できる。もともとの付属屋からみると、炉が置かれていたのは、東側の最も北に近く位置していることがわかる。つまりダオ氏のいう「東東北」は、16 方位でいうところの「東北東」であり、それはまた民俗方位に基づく方位であった。ダオ氏の家の竈神は、間違いなく東東北で祀られ、そこからフエ地域の人々の方位の観念を知ることができる。

このような伝統的な家屋やその間取り、民俗方位などを意識した設計は、現代的な２階建てまたは３階建ての家屋にはほとんどみられない。付属屋がなくなり台所の配置もさまざまである。しかし、人々は今でも竈神を祀る方位を占ってもらったり、新しい家に最初に竈神を祀る日を選んだりしている。そのことからみれば、人々が生活のなかで方位や吉日など重視していることがわかる。

方位については、現在の人々が意識する方位が民俗方位なのか自然方位に基づくものなのか、まだ確認できていない。また、なぜ台所や竈神が東に置かれるのか、例えば王宮との比較では、王宮内の神厨は西側に作られていることとの関係なども十分な調査ができていない。

図 3-2　台所と竈神の配置

②祭壇の方位と竈神による災い

フエ地域の人々が竈神を祀る方位は重要であると考えていることやその配置については前述してきた。竈神を祀る方位について言及されたものはフエ地域にはない。南部メコンデルタのカインハウ村を調査したヒッキーが炉の位置と災いについて触れているため、前述しているが少し記しておく。台所を計画する際は部屋の北西側または西側に炉を作るのが最も良く、その理由は火がこれらの方向に関連する五鬼への入口を禁ずるからである。そして、竈神は炉の位置が悪いと家族に災いをもたらす可能性があるため、台所を作るときには風水師を雇うのが賢明である（Hickey 1964:41）。ヒッキーが記した方位についてはフエ地域との比較や考察の余地があるが、炉の位置と竈神の災いについてはフエ地域と共通する部分である。ここでは、竈神による家族への災いについて具体的にどのようなものかをフエ地域の事例から述べたい。

・事例 4：竈神を祀る方位と父親に起こった災いについて

ファン・ティ・タイン・ヴァン（PhanThị Thanh Vân）氏[28]

ヴァン氏は 40 代（2017 年）、現在はフエ市旧市街に夫と 2 人の子ども、夫の両親と暮らしている。彼女にとって竈神は非常に重要な神であるという。以下に記す話は、ヴァン氏の父親に実際に起きた話であり、ヴァン氏が両親や姉たちから聞いてきたものである。

ヴァン氏の両親は、結婚してフエに新しい家を建てた。しかし当時は家の土地も狭く、特に竈神に対する深い信仰も持っていなかったため、炉の配置には注意を払っていなかった。その後、父親が突然、原因不明の神経の病気に罹り、人の顔も自分の家も道路も何もかもわからなくなってしまった。病院に行っても原因はわからず、病気が治らないまま半年程が過ぎた。病院に行っても治らないため、ある日占い師のもとを訪ねた。すると、その占い師は、炉の方角が父親と合わないために病気になったのだといったという。そして、実際に占い師がいう正しい方位に炉の配置を変えたところ、とたんに病気が治ったという。1960 年頃の出来事である。

この話は、まさに炉の方位を違えたために起きた竈神の災いである。ヴァン氏の父親はこの約半年間のことを全く記憶していなかったという。そして、ヴァン氏によるとこのような話は、特別なことではないという。家族に突然、原因不明の不幸な出来事が起きて、占い師のもとを訪ねると、竈神の配置か井戸に原因があるといわれることが多いという。そのため今でも特に台所の配置は大事にし、家を建てるときや引越しのときには、必ず吉日と時間を調べて竈神を置くのだという。

上記のような具体的な話が聞けたのは、今回はヴァン氏の事例だけである。しかし、方位が重要だという話は多くの人が語っている。人々は、基本的に竈神にとっていい方位といわれている方角に祭壇を置いて祀り、もし何か家族に問題が起きれば、そのときに占い師にお願いして竈神を祀る方位をみてもらう場合が多いという。

このように竈神が家族の守護だけでなく災いを起こすこともあることは非常に重要であり、次節で考えてみたい。

第 4 節　フエ地域の竈神

これまで述べてきたことをもとにフエ地域の竈神について以下の四つの項目から特徴を明らかにし、最後にフエ地域の竈神とはどのような神かを述べたい。

（1）伝統的な儀礼の継承と独自性

ここでは、古い儀礼の形式を継承しつつ祭具を独自に作り出したフエ地域の竈神の特徴について述べていきたい。

・竈神の見送りと小型の神像

まず、祭壇で祀られる小型の神像の新旧交換についてみていく。12 月 23 日の儀礼での竈神

[28] ファン・ティ・タイン・ヴァン氏は故都フエ遺跡保存センター（Trung tâm Bảo tồn Di tích Cố đô Huế）に所属している。故都フエ遺跡保存センターは、フエの文化遺産の保存・修復・管理を行なっている機関である。

の神像の見送りは、これまでフエ地域の竈神儀礼として取り上げられてきた（Trân Đại Vinh 1995:85, Huỳnh Đình Kết 1998:32-33, 2001:52,86, 大西 2002:96-97, Huỳnh Ngọc Trảng, Nguyễn Đại Phúc 2013:49-50）。現在の送神儀礼で使われる小型の神像は、実はそれほど古いものではない。第４章で詳しく述べるため、簡潔に竈神の神体と台所形態の変遷からみていくと、もともとフエ地域でも土製支脚が竈神であった。実用品として使用しなくなったあとも、しばらくは地炉に土製支脚を置いて時々火を入れて祀っていたという話がある。神像を製作している人たちは、今でも土製支脚を生産し続けている。それは、実際に土製支脚を使用し、そのものを神として祀っていた人たちのなかには、今でも竈神の神体は土製支脚であり、それを祀りたい人たちがいるからである。しかし、多くの家では台所の形態が変わるなかで小型の神像へと神体を変えて祀るようになっていた。

竈神の神像の見送りは、本来は実用品である土製支脚を使用して行なわれていたものであった。そして、この土製支脚の新旧の交換は、第１章の竈神の歴史的変遷で述べたように、オジェ編纂の版画や『安南風俗冊』にも記されている。また、第２章では、北部地域や中南部地域でも 30～40 年ほど前まで、調理に土製支脚を使用していたときには、新旧交換が行なわれていたことが明らかになった。フエ地域だけでなくベトナム全土で行なわれていた儀礼であった。

フエ地域の特徴といわれてきた、陰暦 12 月 23 日の儀礼の最後に行なう竈神の見送り儀礼、神像の新旧交換は、実際には北部や中南部地域では台所形態の変遷のなかで行なわれなくなったものが、フエ地域では土製支脚から小型の神像へと形を変えながら継続されてきたということである。すなわち、儀礼は継承されながら、その神体が実用品としての土製支脚から小型の神像へと変化したということがフエ地域の独自性である。

・竈神の版画

フエ地域では、竈神儀礼の際に必ず燃やされる竈神の版画がある。農村であるシン村で生産される版画は、フエ地域では非常に需要のあるものであるが、他の地域ではほとんど用いられていない。しかし、歴史を辿ると、第１章で述べたように北部地域では 18 世紀に毎年正月に新たに竈神の絵を貼っていたことが記されている。20 世紀初頭には北部地域では行なわれなくなっていたが、18 世紀のテクラ神父が記した竈神の絵の影響がフエ地域に入っていた可能性は高い。北部地域で行なわれていた竈神版画を貼り交換するという儀礼は、そのもとを辿れば中国の竈神や民間版画の影響があることは明らかである。

フエ地域では、現在においても竈神の版画が用いられている。祭壇で１年間祀ったあとで儀礼の日に燃やすこともあれば、儀礼の日に他のマーとともに祭壇に供えたあとすぐに燃やす場合もあるが、これもまた、北部地域から伝わった古い儀礼の形式であろう。版画においても、神像と同様に、北部地域で行なわれなくなった儀礼がフエ地域で独自の竈神版画を形成しながら継承されてきたということができる。その竈神の版画の独自性は、フエ地域の歴史的な背景とともに王宮の置かれた地域で生産されたことにより、描かれ方などに特徴が生み出されたといえる。版画の製作やモティーフについては第６章で詳しく述べていきたい。

・家の神と竈神

また、竈神が男性の本命神のひとつとして祀られることについても、現在はフエ地域の特徴とされているが、北部地域について記された資料を遡っていくと 17 世紀に家で祀られる三つの

神として記されている。そのことから、この先師・竈神・土公の神もまた北部地域から持ち込まれた信仰であるといえる。そのなかでフエ地域に入り変わっていったのは、それぞれの役割を持った神として祀られていた先師・竈神・土公が、三柱で一つの男性の本命神として祀られるようになったことである。そして、先師や竈神は個々の役割を持った神としても伝わっているため、同じ神が重複しているのである。しかし、女性の本命神については記述などがなく、もしかするとフエ地域で新たに作られた信仰の可能性がある。

（２）民間信仰と竈神

次に、民間信仰との関わりから竈神をみていきたい。フエ地域の家レベルの民間信仰は、土地に関わる儀礼が多いことが特徴としてあげられる。特に、土神儀礼でのチャンパへの供物、失守京都による孤魂を祀る儀礼、それ以外でも多くの家や店で毎月の朔望に孤魂に対する儀礼をみると、フエ地域の人々が土地に関わる神霊、孤魂を重視していることがわかる。

そして、儀礼を行なう場所の違いもみえてくる。失守京都による戦死者を祀る孤魂の儀礼や朔望に祀る儀礼は、必ず門の外に祭壇を設けて行なっている。しかし、陰暦２月または８月に行なう土神儀礼は、敷地内に祭壇を設置している。人々にとって、家の敷地内の空間と外の空間では、祀る対象や行なう儀礼が意識的に区分されている。敷地の内と外に関連して、まだ十分な調査はできていないが、一つ記しておきたい。フエ地域の人々は、昔も今も事故や病気などの理由で家の外で亡くなった家族の葬式は、基本的に家のなかではなく門の外で行なうという。たとえ大切な家族であっても、良くない死に方をした死者（の魂）を敷地に入れることはできない。その境界は、屋外と門の外である。このことから、人々が死者の霊魂に対して抱いている恐れの大きさを垣間みることができる。

屋外にはアム（庵）とよばれる小祠が建てられている。末成も指摘しているように、アムは敷地、集落、村の内で祀られる。家レベルでみると屋外で祀られている。そこには、前主や先住民のチャンパなど自分たちの敷地に関連する霊魂や神霊、そして屋内では祀られないバーコー（婆姑）などが祀られている。自分たちの家族、祖先の霊も含めて屋内と屋外で祀る神や霊魂に区分がされていることがわかる。自分たちの住まう空間を、敷地（門）の外、敷地の内のなかでも屋外と屋内に意識的に区分して、祀る神や行なう儀礼を決めているということができる。

このような信仰や儀礼の空間からみると、竈神は敷地のなか屋内で祀られる神であるといえる。竈神のほかに屋内で祀られているのは、男性と女性の本命神である。役割からみると、男性の本命神は家主を保護する神であり、女性の本命神は財神として家主の妻（最近では息子の妻も）経済面を保護する神であり、保護の範囲は個々に限定されている。屋内で祀られる神のなかで家族を保護しているのは竈神である。

（３）竈神の両義性

他の地域では社会や経済、また台所形態の変遷にともない竈神を祀る儀礼も変わっていったにもかかわらず、フエ地域では竈神の神像など形態を変えながらも古いベトナムの儀礼の形式が継承されている。そして、そこには人々の竈神に対する観念として、「家族の守護」と「災異の神」という両義性がみられる。

フエ地域の竈神の役割は、ベトナムの各地域と同じように、優しく家族を保護する神である。

しかし、一方で祀る方位を誤れば、家族を守護するはずの竈神による家族への災いが起きる。人々はそれを信じ、正しく祀ることを重視している。それは、「信じて祀れば優しい神であるが、信じなければ怖い神」という言葉に人々の竈神に対する観念が集約されていると思われる。この両義的な性格がなぜフエ地域で強調されてあらわれるのか歴史的背景からみていきたい。

まず、土地に関わる儀礼の多さから考えたい。現在のフエ地域の人々は、自分たちの祖先がベトナムの南進政策により先住民であるチャム人の土地を奪ったこと、その土地の上に自分たちが暮らしていることを日常の生活のなかで絶えず意識している。チャム人への畏怖は、17 世紀には仏教による慰霊が行なわれていた（大西 2012a:14, 2012 b:18）ことからもわかる。また、土神儀礼や失守京都による孤魂への鎮魂儀礼、屋外にいくつもの庵を建て祀ることからも土地がもたらす災いに対して人々が非常に恐れていることがうかがえる。

その背景には、フエ地域の厳しい気候条件とそれに伴う生活の厳しさがある。北部や南部地域に比べ、フエ地域は農地が非常に少ない。そのことは、『越南開国志伝』[29]に、広南国初代当主である阮潢の中部派遣に際し、広南と順化の二処が非常に悪地であると伝えた記述があり[30]、また『撫辺雑録』[31]では、広南国 200 年余の中部開拓を総括して、人口に対して実田が少なく、南部の穀倉地帯ドンナイからの米が途絶えると米価が高騰すると記されている[32]。

フエ地域の厳しい自然環境のなかで生活する人々にとって、土地に関するさまざまな災いは切実な問題である。そのため神霊や霊魂を祀り、鎮魂の儀礼を行ない、家のなかでは竈神に家族の保護を祈願してきた。そして実際に災いが起きたとき、人々はその原因をチャンパや孤魂による災いとし、また家族の最も近くに存在する竈神の災異として受けとめ、さらに鎮魂儀礼が重要視され、竈神に対しては正しく祀っていなかったことや竈神の力を信じていなかったことに災異の理由を求めたのではないだろうか。家族にとって身近で最も力のある神だからこそ、竈神が災異をももたらす両義的な神となったのではないだろうか。

（4）フエ王宮の存在

また、フエ王宮の存在はフエ地域の人々の暮らしと大きく関わっている。それは竈神を祀る儀礼にも大きく影響し、チャン・ダイ・ヴィンは、フエ地域の民間の竈神儀礼は、宮廷での儀礼の日時に従い、いつでも人々は宮廷儀礼より控えめな標準的な儀礼を行なうことを心がけていたという[33]。竈神を正しく祀るという意識がここから作られたとも考えられる。それはシンプルな供物にも関係し、古い儀礼を継続させていることにもつながる。

しかし、王宮との関わりから考えると、人々の家屋の配置などに皇城の配置との矛盾がみられるため、もう少し慎重にみていく必要がある。

---

[29] 広南阮氏の吏部尚書阮科占（1659–1739）が 1719 年に撰述（大西 2003:114）。

[30] 「妾竊聞廣南、順化二處、乃毒峯惡水、凶蠻之地、人皆惡之、」

[31] 18 世紀後期黎朝の儒者黎貴惇（1726-1783）が 1776 年に記した広南国の歴史・地理書。

[32] 「順化処二百年生聚之余、邑里相望。即癸巳年丁簿、九県州、八百六十二社、村坊人数共十二万六千八百五十七人。納差余銭至十五万三千六百貫、可謂盛矣。而実田、不過十五万三千一百八十二畝。豈非人多田少。昔辰同犯商販流通富春米十升為一斛、僅銭三陌、可充一人一月之食。民未汲汲置農也。今帰仁構乱、嘉定隔阻、人相以乏食為憂。」

[33] 2013 年チャン・ダイ・ヴィン氏のご教示による。

（5）まとめ

フエ地域の竈神の特徴とされてきた儀礼は、北部地域など他の地域では行なわれなくなった古い儀礼が残され、その儀礼を継承するために祭具が新たに形成されたことが明らかになった。

人々が新たな祭具を生み出し、竈神の儀礼を継承してきた理由の一つは、正しく祀らなければ災いがあるという災異神としての側面を持つ竈神の両義性にある。その背景には、フエ地域の厳しい自然環境のなかでの人々の生活が大きく影響している。土地に関するさまざまな災いの原因をチャンパや孤魂などと結びつけ、そのことが多くの土神儀礼を生んだのだろう。そして家族を守る竈神に対しても保護を求める力が強いからこそ、災異神としての側面が作りだされたのだろう。非常に恐ろしい神は、強大な力で守護する神となる。それが強くあらわれたのが最も弱い子どもを保護する神という役割であった。人々にとって非常に切実な願いであったのだろう。

また、二つ目として、フエの王宮のもとに暮らすことの影響も儀礼を正しく継続してきたことの要因であった。そして、正しく儀礼を行なうために、祭祀や儀礼で用いる道具を変えていったのだと考えられる。フエ王宮の影響は、竈神の版画のモティーフにもあらわれる。それについては、第５章で述べていきたい。

フエ地域の人々が祀る竈神の特徴には、フエ地域の歴史が大きく関係する。しかし、もともとは北部地域から伝わり、ベトナム全土で行なわれていたものである。そのことを考えると、儀礼の形式の継承だけでなく、竈神に対する観念としての両義性もまた、ベトナムの人々が抱いていたものではなかっただろうか。そのなかで、フエ地域の人々の生活が歴史的にも自然環境的にも厳しいなかに置かれてきたことにより、より竈神の両義性が強調されながら継承されてきたのではないだろうか。

第４章　物質文化からみた竈神（１）—フエ地域で形成された竈神の神体—

フエ地域の竈神の祭壇で祀られる小型の土製の神像について、物質文化研究の視点から論じていきたい。この土製の神像はフエ地域のディアリン村の数軒の製作者により手作業で生産されている。どの家庭でも祀られているが、フエ地域以外ではほとんどみることがない。

竈神の神像（神体）に関する研究は、管見の限りフエ地域の文化や信仰の研究だけでなく、どの分野からも行なわれていない。唯一、考古学者である西村がディアリン村の土器生産について調査した報告があり、その土器生産のなかに竈神の神像も作られていることが記されている（西村 2012c）。非常に重要な報告であり、その資料をもとに神像製作者への調査を行なってきた。

本章では、ディアリン村の神像製作者への聞き取りを中心として、神像製作の実態と変遷、竈神の神像と神体と実用品としての竈の関係、台所形態と神像の変遷を明らかにする。そして、神像を祀る人々への聞き取りもあわせ、神像を祀ることからみえるフエ地域の竈神を考察する。

第１節　フエ地域の竈神の神像

（１）現在の竈神の神像

現在、フエ地域の家庭で祀られている神像は３種類である（写真 4-1）。実際に調理に使用することもできる土製支脚は、神像を製作する人々のあいだでは大きいオンタオ（竈神）という意味でオンタオ・ロン（Ông Táo lớn）と呼ばれている。その土製支脚を象った小型の神像は、オンタオ・クアン（Ông Táo quân : 翁灶君）、竈神三柱を象った人格化された神像は、オンタオ・グオイ（Ông Táo người : 翁灶人）と呼ばれる。オンタオ・ロンは素焼きのみである。オンタオ・グオイは素焼きと漆が塗られた２種類があり、オンタオ・グオイは素焼き、漆、カラフルな色付けされた３種類がある。

オンタオ・ロン (Ông Táo Lớn)
実用品も兼ねた土製支脚
【大きいオンタオ】

オンタオ・クアン (Ông Táo Quân)
【翁灶君】

オンタオ・グオイ (Ông Táo Người)
【人(型)のオンタオ】

写真 4-1 現在の竈神の神像

（２）台所と竈神の神像

ここでは、どのような台所に竈神の祭壇が置かれ、神像が祀られているかみていく。フエ地域の都市部ではガスコンロを使用する家庭が多いが、村落の台所形態はもう少し多様である。ガスコンロが置かれた台所で祀られる竈神については第３章で述べてきたため、その他の台所

形態と竈神について述べていきたい（写真 4-2）。

写真 4-2①の家ではガスコンロの使用はなく、地面から少し高くして作られた炉に土製支脚が置かれている。三つの土製支脚は上半分が壊れており、その上に三角形にした鉄の棒を置いて、実際に煮炊きをしている。土製支脚を使用しているが、神体として祀ってはいない。炉が置かれた場所の壁の上部に祭壇が作られ、漆が塗られたオンタオ・グオイが祀られている。②の家でもまだガスコンロは使用していない。地炉に大小の土製焜炉と真ん中には五徳が置かれている。その上部に祭壇が作られ、素焼きのオンタオ・グオイが祀られている。③の家では台付き炉[1]に五徳が置かれ、そこで日々の煮炊きがされている。この家もガスコンロは使用していない。台付き炉の奥にオンタオ・グオイが祀られている。④の家は、ベトナムの近代的な家屋で３階建ての１階に台所がありガスコンロが使用されている。しかし、竈神は台所にはいない。３階の一部屋に祭壇が集められ、そこで祖先や本命神、竈神がそれぞれの祭壇で祀られている。この竈神は、前述したホー・ヴァン・イェム氏の信仰する竈神である。そのため、他の家とは異なる祭壇の設置をして、またイェム氏の特別な神像と竈神の版画が置かれている。

以上、わずかな事例ではあるが、ガスコンロの使用の有無にかかわらず、現在ではどの家も壁の上部に祭壇を作り小型の竈神の神像が祀られていることがわかる。

①シン村のある家の台所と神像　②フオンホー社のある家の台所と神像　③フォックティック村のある家の台所と神像　④フエ市内のある家の祭壇と神像

写真 4-2 フエ地域の台所と竈神の神像

（３）木の下や廟、庵で見送られた竈神の神像

竈神の儀礼で神像の新旧交換が行なわれること、この交換が現在のフエ地域では小型の神像を用いていること、以前はベトナム全土で土製支脚を交換することが行なわれていたことは、すでに第３章で述べた。

現在でもフエ地域では、木の下や廟などには少ないが土製支脚も置かれている。そのほとんどは煤などの付着がないため、実際に使用していたものではなく、神体として祀っていたものであることがわか

写真 4-3 見送りされた神像の一部

[1] 第３章でも述べたように、立って使う台に炉が置かれた、写真４-２③のような形態の炉を本研究では便宜上「台付き炉」と呼ぶ。

る（写真 4-3）。

（4）市場などで売られる神像

竈神の儀礼の１週間から 10 日くらい前になると、ドンバー市場だけでなく小さな商店や道沿いなどでも竈神の神像が売られるようになる。神像だけで売られる場合もあるが、近年は神像と竈神の版画とアオビンとよばれる竈神の服が３枚、１セットになったものが多く売られている（写真 4-4）。また、祭壇に供える小さな鏡や櫛も置かれており、それらも一緒に購入していく人もいる。北部地域の竈神のマーセットのような立体的なものが、ドンバー市場など大きな市場に売られているが、購入する人は非常に少ない。フエ地域では、立体的なマーのセットと大量の紙銭は竈神の儀礼には用いないが、新年儀礼や本命神の儀礼では用いられている。また、大量の紙銭は、毎月の朔望に店の外に祭壇を設けて孤魂などを祀る際にも用いられる。竈神の儀礼は、非常にシンプルなのである。

写真 4-4 野菜と一緒に売られる神像セットと櫛と鏡

第２節　ディアリン村で神像が製作されるまで

ここでは、現在ディアリン村で製作されている神像が、どのような経緯でいつ頃から製作されるようになったのかを辿っていく。

（1）ディアリン村の概況

ディアリン（Địa Linh: 地霊）村はフゥオンチャー県フゥオンヴィン（Hương Vinh）社に属し、ナムホア（Nam Hòa 南和）、ドンタイン（Đông Thanh 東成）、ゴアトゥオン（Ngõa Tượng 瓦匠）の三つの集落（xóm）から成り立っている（地理情報収集班 2012: 65）。フゥオンヴィン社は、南域をフエ都城に北接し、東界にフオン河、フオン河に合流するボー（Bồ）川が北界となる（地理情報収集班 2012: 63）。ディアリンの名前は、『烏州近録』に「地霊」として登場[5]しており、16 世紀には成立していた村である。

ディアリン村の手工業について、黎貴惇の著した広南地域の地誌『撫辺雑録』によると、広南阮氏の時代（1558~1788 年）に民間手工業として紡績が行なわれていた（グエン 2012 : 485-486）。阮朝（1802~1945 年）時代には、国家の手工業としてフエの宮廷建築群を築くため、工部、承天府[6]のもとで多くの建築材料を製造する大きな二つの工廠が作られ、そのひとつが現フゥオンヴィン社を中心とするゴアトゥオン（瓦匠 Ngõa Tượng）、ナムタイン（南清 Nam Thanh）、ヴァンク（Vân Cù）の塼製造工業であった（グエン 2012 : 491-492）。民間の手工業としても、ゴアトゥオン集落は専業的な手工業村として塼を製造し、宮廷に仕えなくなってからは民間に販売したとある（グエン 2012 : 492）。このゴアトゥオン集落には、1935 年時点でレンガ窯が操業していることが確認されている（西村 2012b: 54）。

現在、フエ地域の人々が使用する竈神の神像はディアリン村のゴアトゥオン、ナムホア集落に住む６家族が製作している。

（2）ディアリン村の初代神像製作者

①ホアン・ヴァン・チュン（Hoàng Văn Trung）氏

ディアリン村に暮らす現在の竈神の神像製作者によると、60年ほど前にホアン・ヴァン・チュン氏が今まで手で捏ねて作っていた実用品としての土製支脚を型で作るようになり、同時に土製支脚を象った神像オンタオ・クアンの生産も始めたという。チュン氏には4人の息子がおり、以前は竈神の神像を作っていたが、現在は別の仕事をしている。娘のホアン・ティ・トゥ氏がいとこのゴー・ドック・フン氏とともに神像の製作を続けている。後述するチュン・ヴァン・ムオイ氏も初めはチュン氏から土製品の作り方を学んでいる。また、チュン氏が土製支脚を型で作る以前、人々は各家庭で自分たちの手で粘土を捏ねて作っていたという。

②ヴォー・ヴァン・ラック（Võ Văn Lạc）氏

ヴォー氏4兄弟の父である。4兄弟によると、以前はディアリン村でレンガを製作しており、60年くらい前に竈神の神像を作り始めたという。きっかけは、シン村の人が製作した神像を市場でみて、レンガ製作を応用して作れるかもしれないと考えたことであった。購入してみようみまねで作り始め、その後シン村に作り方を聞きに行ったこともあるという。

（3）シン村の神像製作

シン村で土製品の生産をしていたのはミー・ヴァン・ロイ（Mỹ Văn Lời）氏、42歳（2013年当時）である。農村であるシン村でロイ氏は水田を持っておらず、農業は行なっていない。祖先はフォックティック村と同じフォンディエン県フォンホア社のウーディエム（Ưu Điểm）村出身で、一時期仕事でラオスに行っていたが1945年にベトナムに戻り、その後シン村に住み始めたという。家譜に土器生産や竈神の神像製作について書かれていないため、もともと祖先は土器や竈神の神像の製作はしていないが、数世代前の祖先から石灰壷や釜など土器生産を行なっており、そのときには竈神の神像も作っていただろうという。

ロイ氏自身は2001年まで土製品や竈神の神像を作っていたが、現在は別の仕事をしている。シン村で竈神の神像を製作していたのはロイ氏の家族のみであり、他の製作者は ティウソン（Triều sơn）村にいたという。最初は実用品としても使用していた土製支脚のオンタオ・ロンを作っていたが、次にへそのついたオンタオ・クアンを10年程作り、最後に3人が描かれたオンタオ・グオイを製作するようになった。オンタオ・グオイは最近のものであり、以前は全くなかったという。神像は次第に小さなサイズになっていったとのことである。

ロイ氏の土製品の特徴は型をセメント（xi măng）で作っていることである（写真4-5）。両親や祖父もセメントの型を使用しており、初めから木の型は使用していない。その理由は木の型を自分で彫る技術がないからだという。セメントの型の作り方は、初めに粘土を練って竈神の神像の形を作る。セメントには強度を増すために金属（thép）を入れる。型の厚さは約3cm、範囲を金属で固定する。竈神の神像にピーナッツオイルを塗り、その上にセメントを流し込む。ピーナツオイルを塗ることでセメントから竈神の神像が取り出しやすくなるという。セメントが固まったら神像を取り出して完成である。

写真4-5 ロイ氏のセメント型

その型を使用して、竈神の神像の成形を行なっていた。残念ながら現在、型は残っていない。また、窯は自分たちで丸形の窯を作り、燃料は籾殻を使用していたが、それも現在は残っていない。

竈神の神像は全て市場で販売し、昔は両親や祖父は舟でドンバー市場まで売りに行っていた。そのときはまだディアリン村では竈神の神像をあまり製作しておらず、神像を製作する際に問題があるとディアリン村の人たちがシン村まで聞きに来ていたという。

（4）フォックティック村の土製支脚と神像の製作と竈神の神体

①フォックティック村の土製支脚と神像

フォックティック村は、3章でも述べたように17世紀以前から窯業が盛んな村である。シン村のロイ氏の祖先がフォックティック村の隣村出身ということから、神像製作について調査を実施した。現在は、土製支脚も小型の神像も村では作られていないが、おそらく、最初に竈神の神像を製作したのはフォックティック村である。

村の人たちによると昔、土製支脚を調理に使用していた頃は各家でそれぞれ作っていたという。手で土を捏ねて成形し、そのあとは持ち寄った土製支脚を村の共同の窯で一緒に焼いていた（写真4-6）。次第に土製支脚を使用する家が少なくなると、共同の窯で焼くこともなくなり、最後は、ホー・ヴァン・ナイ（Hồ Văn Nạy）氏が一人で2011年頃まで専業で作っていたという（写真4-7）。

写真 4-6 フォックティック村
手で土を捏ねて成形した土製支脚

ナイ氏は土製支脚だけでなく、竈神の神像も作っていた。数年前に亡くなり、型も窯も壊してしまったため残っていない。村長のホアン・タン・ミン（Hoàng Tấn Minh）氏（62歳2016年当時）の話では、村のなかでナイ氏とミン氏の父親が小型の神像と土製支脚を専門で作っていたという。ミン氏の祖先はもともと陶器を作っていたが、父親の代から土製支脚と神像だけを作るようになった。その当時は7月に竈神の成形をして、日差しの強い7－8月に屋外で乾燥させ、11月に焼成していた。そして、フォックティック村の近くの市場に売りに行っていた。ミン氏の父親は1999年まで竈神を製作していたが、2000年に亡くなっている。フォックティック村では、ナイ氏が2011年に亡くなると土製支脚と神像の生産に携わる人はいなくなった。

写真 4-7 フォックティック村　土製支脚と型

2人が専門で製作していた神像は、土製支脚を象ったオンタオ・クアンであった。ミン氏によると、フォックティック村で作られたオンタオ・クアンの特徴は土製支脚を象った3本のあいだには切れ目があり、真ん中にはヘソがつけられていたという。現在、神像も型も残っていない。しかし、村のなかの廟の木の下に見送りされた神像が残されていたため、ミン氏に確認

すると、ナイ氏とミン氏の父親が作っていたものと同じであるという（写真 4-8,106 頁）。

②台所の変遷と竈神の神体

ここで少し、フォックティック村の台所の変遷と竈神の神体について触れておきたい。家により差はあるが村の人たちが土製支脚を調理に使用していたのは、1950 年～1980 年頃までである。土製支脚から土製の焜炉や五徳に煮炊きの中心が移り、ガスコンロが使用されるようになったのは、早い家では 1980 年初め頃である。現在もガスコンロを使用していない家がいくつもある（写真 4-2③）。

写真 4-9 トゥ氏の家の台所

形態はもともと地炉に土製支脚を置いていたが、炉が立って使う台になり、そこで五徳や土製の焜炉を使用してきた家が多い。現在でもガスコンロを用いず、台付き炉に五徳を置いて調理をしている家もある。また、ガスコンロを設置したあとで新たに台付き炉を作り、そこに五徳を置いている家もある。第 3 章のフォックティック村の家屋で紹介したチュオン・ティ・トゥ（Trương Thị Thú）氏（87 歳 2015 年当時）の家の台所は、戦争が終わり 1975 年に実家に戻ったときから台付き炉に五徳を置いて調理してきた、現在まで何も変わっていないという（写真 4-9）。

写真 4-10 フォックティック村博物館
昔の炉と竈神（展示）

それらの台所で祀られてきた竈神は、トゥ氏をはじめ村の人たちの話では、昔から小型の神像であったという。自分の敷地に博物館を作ったレ・チョン・ジエン（Lê Trọng Diễn）氏（68 歳 2014 年当時）によると、村の人たちは土製支脚を煮炊きに使用していたときも小さい竈神オンタオ・クアンだけを祀り、土製支脚は尊敬していたけど祀ってはいなかったという（写真 4-10）。いつ頃からオンタオ・クアンが作られ、祀られるようになったかはわからないが、70−80 歳代の村の人たちが子どもの頃から土製支脚を使用していても小型の神像が祀られていたことは明らかである。

（5）ディアリン村で神像が製作されるまで

ディアリン村の神像製作が始まるまでを遡ってみてきた。現時点での調査によれば最初に小型の神像が作られたのは、フォックティック村である。実用品としての土製支脚と小型の神像オンタオ・クアンの 2 種類が作られていた。2011 年頃まで村で生産されていたが、その流通はフエ市内までは届いていなかった。フォックティック村の小型の神像を真似て、ロイ氏の祖父母と両親がシン村で生産をしていた。そのときも土製支脚とオンタオ・クアンの 2 種類であった。そして、ドンバー市場で売られていた神像をみたディアリン村のレンガ生産者たちが、レ

ンガ生産を応用して神像が作れると考え、取り入れたのである。それが今から60年程前のことである。現在、ディアリン村で神像を製作している人たちは2代目の世代である。当初は2種類であった神像は、ディアリン村で新たな型が創造された。

現在はその新たな神像が主流になっているが、それらについては神像製作者への聞き取りをもとに、次節で述べていく。

第3節　現在の竈神の神像製作と流通

（1）ゴー・ドゥク・フン（Ngô Đức Hứng）氏とホアン・ティ・トゥ（Hoàng Thị Thu）氏

フン氏は、53歳（2016年）男性、ゴアトゥォン集落でいとこ（母親の妹の娘）のトゥ氏と土器の生産をしている。祖先はクアンビン（Quảng Bình）省の出身である。フン氏の家では竈神の神像だけではなく、棺桶のなかに入れる五穀壺（cốc ngũ cốc）[2]や死者の頭を固定する土枕なども生産している[3]。両親は土器の製作はしておらず、叔母（母親の妹）から仕事を受け継いだが、この叔母はトゥ氏の母親であり、トゥ氏の父親はディアリン村で最初に竈神の神像を作り始めた一人、ホアン・ヴァン・チュン氏である。フン氏は25年ほど前から竈神の神像を作り始め、最初は実用品も兼ねた土製支脚のオンタオ・ロンとオンタオ・クアンの2種類を作っていた。オンタオ・クアンの型は最初にチュン氏が使用していた型と同じものを使っていたが、その後フン氏は自分で改良をしていく。元の形はフォックティック村の神像と同じように土製支脚を象った上の部分が分かれており、その部分が壊れやすかったために、裏側を1枚で繋げ表面の部分だけ3本の土製支脚を表現した（写真4-11）。これを作り出すのに時間がかかったが、それにより壊れにくくなったという。またフン氏のオンタオ・クアンの特徴は、真ん中の女性の部分にヘソが作られていることである。型にヘソの部分が削られているため、神像はデベソのように膨らんでいる。以下にフン氏の神像製作について項目をあげて整理していく。

3本の間：切れ目 真ん中：ヘソ	表面のみ：切れ目 強度を増す	オンタオ・グオイ ヘソを作る

写真4-8
フォックティック村の神像

写真4-11 フン氏の製作する神像
オンタオ・クアン（中）　オンタオ・グオイ（右）

[2] 五穀壺にはイネ（lúa）、マメ（đậu）、もち米（nếp）、ゴマ（mè）、トウモロコシ（bắp）を入れるという。

[3] ディアリン村では村落共同体の中心を占める主要氏族である「六大族」：黎族・阮族・陳族・張族・李族・黄族（岡本2012：124）のうちの陳族の一族の中には葬式用の棺桶などを製作する木工が多く、20世紀半ばにおいて、棺桶製作をする家は30軒近くありそのほとんどは陳族と黄族であったという（西村2012b: 52-53）。霊和祠には大工神である魯班と九天玄女が祀られている（西村2012b:53）。

①神像の製作と竈神

神像の製作を始めるときには、自分の家の竈神に祈願をする。フン氏の竈神の祭壇は台所のガスコンロの置かれた壁の上部に作られ、香炉とオンタオ・グオイの神像と版画、水が置かれている。シンプルなものである。

②竈神の神像にまつわる話

台所は清潔にして、竈神を祀る場所も綺麗にしておかなければならない。もし清潔が保てないと病気になり、また、竈神の神像を鶏が倒すと子どもが病気になる。子どもが目の病気や涙が非常に出る場合は、竈神の神像を削って目につけると治るという。

③竈神の神像の生産

現在は３種類の神像を作っているが、フン氏のところでは、成形して乾燥、焼成までを行なう。色付けはせずに、素焼きのまま買取りの業者に渡している。基本的に作業はトゥ氏が素地作りを担当し、成形はフン氏が行なっている。

叔母から仕事を受け継いだ頃は、オンタオ・ロンとオンタオ・クアンの２種類の神像を同じほど生産していたが、次第にオンタオ・ロンよりオンタオ・クアンを多く作るようになっていった。小さい方が祀るのに便利だからだろうといい、土製支脚を実用品として使用していても祭壇にオンタオ・クアンの神像を祀る人が増えていったという。しかし、現在もオンタオ・ロンは製作している。それは、竈神の神体は実用品でもあったオンタオ・ロンだと考えている人たちがいるためである。しかし、主流はオンタオ・グオイであり、もっとも多く生産している。

④型

フン氏は、型をオンタオ・ロン一つ、オンタオ・クアン五つ、オンタオ・グオイ五つ、所有している。型は捨てずに取っておいて、必要なときに取り出して使用しているため多いのだという。最も古い型は約 15 年間使用している。型作りは彫刻師に依頼し、費用は型の原料と彫刻を合わせて 300,000 ドン（約 1,500 円）、その後できあがった型に、自分で工夫して手を加えている。現在使用しているオンタオ・クアンとグオイの型はともに両側に金属の棒をはめ込んでいる。成形のときに型に入れた粘土を糸のこで削る際の滑りがよくなるのだという。また、三柱を象った神像では顔の表情、特に鼻を綺麗に残すための工夫もしている。フン氏の神像の特徴は、オンタオ・クアンだけでなくオンタオ・グオイにもヘソが作られている（写真 4-12）。

写真 4-12 フン氏の現在の型

型の原料は、そのときにより変わるが、現在使用しているオンタオ・クアンの型はゾイの木（gỗ dỗi（dỏi,または giỏi））、日本名はタラウマ、幹が堅牢な木質で建材として用いられる（川本 2011:662）。オンタ

オ・グオイの型はフゥオンの木（gỗ hương）、日本名は本花梨またはパドウク（Padoauk, 学名 Pterocarpus macrocarpus）、マメ科の広葉樹で重くて堅い木質が特徴である。

・価格

素焼きの竈神の神像は、2013 年では卸値で 1 個 300 ドン（1 円 50 銭）、2014 年では 500 ドン（2 円 50 銭）、2015 年から 2018 年まで聞いているが、その年により 300 ドンから 500 ドンを変動している。卸値を決めるのは自分で健全な価格競争だという。しかし、自分は素焼きの神像を 500 ドンで売るが、近所の人はその神像を購入し色付けして 1 個 5000 ドン（25 円）で市場などに卸しているようで、自分たちは大変な思いをして作っているが儲からなく、色付けする人たちがより多く儲けているとも話している。

しかし、フン氏はより綺麗で壊れにくい竈神の神像を作るために丁寧な作業を行なっている。例えば、素地作りのときには石などの夾雑物を丹念に取り除き、しっかりと捏ねる。重労働で大変な作業ではあるが、それにより焼成後に明らかな違いがでる。壊れにくく触った感覚もなめらかになるのだという。また、他の人が製作した神像を市場などで購入しては、自分の製作する神像と比較し研究している。

⑤流通

多くはドンバー市場で売られている。フン氏の家では素焼きまでを行なうので、同じ集落の人がそれを買い取り色付けして市場などに卸す場合もあり、また、業者に素焼きの神像を卸す場合もある。クアンナム省ダナンやホイアン、クアンチ省からも人が買い付けに来る。しかし、その場合は箱詰めするための箱やテープ等はフン氏の実費となり、それを差し引くと利益は非常に少なく大変である。祖先の出身地であるクアンビン省でも竈神の神像は流通しており、クアンビン省ではオンタオ・ロンと小型の神像の二つを祀っているという。

⑥箱型レンガ窯

フン氏の窯は庭に建てられた小屋のなかに作られている。大きさは、横幅 120cm、縦幅 123cm 高さ 91cm である（写真 4-17①,116 頁）。フン氏は竈神の神像以外に五穀壺などを生産しているため、窯を解体することはない。

（2）ヴォー（Võ）氏４兄弟

ヴォー（Võ）氏は４人兄弟、ナムホア集落でそれぞれ家庭を持ち、家族単位で土器生産を行なっている。ヴォー家は家譜を所有しており、漢文表記の家譜には、表紙に目録譜諱とある。家譜に記された初代、武（ヴォーVõ）氏は平定省安仁府出身であり、妻の出身は承天府（現在のフエ）、二人の墓が承天府南郊壇近くと記されていることから、平定省から承天府に移ってきたことがわかる。保大 10 年（1935 年）に家譜が編纂されたと記されており、家譜情報から、４代目武文梨（Võ Văn Lê）氏（1886 年生まれ）によって編纂されたと考えられる。そのことから、初代武氏は今らおよそ 100 年前に、ビンディン（平定 Binh Đình）省からフエへ移住してきたことになる。しかし、職業についての記載はない。

４兄弟の父親ラック氏は、前述したディアリン村の初代竈神神像の製作者の一人である。父の時代には集落内で竈神神像を製作していた人たちが何人かいたが、全員やめてしまい、現在

ナムホア集落では 4兄弟のみが神像を製造しているとのことである。

竈神の神像の製作については、次節でヴォー氏兄弟を中心に述べていくため、以下では兄弟それぞれの神像製作に関わる個々の内容を記していく。

①長男：ドック（Đức）氏

4兄弟の長男ドック氏は62歳（2016年）、妻と3人の息子がいる。息子たちは結婚してそれぞれ独立し、神像製作を引き継いでいる人はいない。主に妻と2人で作業をしている。同居している三男夫婦が繁忙期に夫婦で手伝っている。三男は彫刻の仕事をしており竈神の神像の型を製作している。息子が神像の型を作る以前は村の彫刻師に依頼し、そのときは一つの型の価格は200,000ドン（約1,000円）であった。

・神像の生産と窯

現在、3種類の神像を生産しているが、最も多いのはオンタオ・グオイの神像である。1日に約600個を成形する。ドック氏の家は竈神の神像のみを生産しているため、竈神の儀礼が過ぎるとしばらくは焼成しないため、窯を解体する。そして、陰暦3月になると夫婦2人で窯を組み立てる。組み立ては1日で完成するが、その年によって多少大きさが変わるという。2015年の窯の大きさは、約120cm幅×100cm奥×100cm高さである（写真 4-17③,116頁）。現在、最も心配なことは、原料の粘土の価格が上がり、色付けの漆なども高くなっていることである。

・竈神の祭壇

ドック氏の家の竈神の祭壇には、オンタオ・クアンの素焼きの神像が祀られている。1番大切な神像は土製支脚であるオンタオ・ロンのため、それを象ったオンタオ・クアンを祀っているという。その他に中南部の家の祭壇では一般的な「定福灶君」と書かれた神牌も一緒に祀られている。フエ地域では非常に珍しい。また、ドック氏の家にはいくつもの神が祀られている。中央の祭壇では大きな観音の像が置かれ、そのほかに小さな観音像、千手観音、仏陀の絵、地面には財神と土地神が祀られている。その奥には男性の本命神が三つの香炉と男性三柱の神が描かれた絵とともに祀られ、女性の本命神は妻と嫁のそれぞれの祭壇が作られている。

写真 4-13 ズック氏の竈神神体祭壇（上）土製支脚（下）

②次男：ズック（Dực）氏

ズック氏は60歳（2016年）、妻と子ども2人、息子と娘は結婚してそれぞれ子どもがいる。

・神像の生産

竈神儀礼の少し前の繁忙期には、息子とその嫁、結婚して近くに住む娘も戻ってきて家族総出で作業をしている。長男が型入れを担当し、1日に約700個成形する。ズック氏の仕事は窯での神像の焼成である。毎回、焼成する前には線香を供え拝礼してから、火を入れるという。娘は色付

けを担当し、息子の嫁は出来上がった神像をダンボールに詰める作業を行なっている。

・竈神の祭壇

ズック氏にとって竈神は実用品として使用してきた土製支脚であり、また自分たちが作る小型の神像も大切であるため、壁の上部に作られた祭壇ではオンタオ・グオイの神像を祀り、下ではオンタオ・ロンを祀っている。オンタオ・ロンは実際には使用していないが、テトや陰暦1日、14日、30日に炉に火を入れてオンタオ・ロンを温めるという（写真4-13）。

・神像の製作と迷信異端の禁止

1975年以降の迷信異端の禁止による神像作りへの影響については、長男ドック氏と次男ズック氏が記憶している。その当時はまだ実用品も兼ねたオンタオ・ロンの生産が多く、煮炊きのための道具でもあったため、特に何も支障なく生産していた。同時にオンタオ・クアンも生産していたが、問題はなかったという。

③三男：ハイ（Hải）氏

ハイ氏は58歳（2016年）、妻と子ども２人、息子と娘がいる。竈神の神像のみを生産しているため、焼成が終わると窯は解体される。解体された後には、簡易の炉に土製支脚ではなく３点にレンガを積み重ねた竈が作られている。そこで湯を沸かしたりしているようである。別の場所には台所がありガスコンロが置かれている。竈神の祭壇は、ガスコンロの置かれた場所の壁の上部に作られ、色付けされたオンタオ・グオイが祀られている。

④四男：ナム（Nam）氏

ナム氏は51歳（2016年）、妻と子ども２人、息子と娘、ナム氏の母（85歳2013年当時）の家族５人で神像の製作をしている。窯は家の道を挟んだ向かい側の小屋のなかに置かれており、神像を作らないあいだは五穀壺を生産するため解体することはない。窯の大きさは、約145cm幅×130cm奥×100cm高さである。

・竈神の祭壇

ナム氏の家の竈神は祭壇にオンタオ・ロンとオンタオ・グオイの二つが祀られている（写真4-14）。土製支脚であるオンタオ・ロンは竈神として大切であるため、台所の壁の上部の冷たい場所で祀られる竈神をテトや毎月30日、１日、１４日に祭壇から降ろして火をつけて温めている。ナム氏は、竈神を不思議な神だと思っている。綺麗にして竈神を祀ることが大切で、もし汚い場所で祀ると子どもが病気になるという。

写真4-14 ナム氏の竈神神体

・神像の流通（４兄弟）

４兄弟は、ドンバー市場に自分たちで卸しに行く。その他には業者が買い付けに来るという。クアンチ省やクアンビン省でも販売され、最近ではハノイやサイゴンまで流通が広がっている

と聞くが、自分たちは神像を製作して業者に売るだけで、手元を離れた神像がどこに売られているのかはわからないという。

ヴォー氏４兄弟の神像の型は、彫刻の仕方がそれぞれすべて異なるが、ここでは一例としてそれぞれの型を一つずつあげておきたい（写真 4-15）。

写真 4-15 ヴォー氏（４兄弟） 神像の型
オンタオ・ロン（左） オンタオ・グオイ（中）オンタオ・クアン（右）

（３）チュオン・ヴァン・ムオイ（Trương Văn Mười）と息子ダット（Đạt）氏

ムオイ氏は 72 歳（2015 年）、妻と２人の息子がいるが息子たちは彫刻を仕事としており、神像の製作はムオイ氏が一人で行なっている。もともと祖先は大工であり、神像製作はしていない。ディアリン村で周りの人が竈神の神像を作るのを見て自分も始めた。西村の報告によると、1982 年以降に前述したホアン・ヴァン・チュン氏について土器作りを習い作り始めたという（西村 2012 c:286）。

①現在の竈神の神像

ムオイ氏の神像は、素焼きのオンタオ・クアンの１種類のみであり、市場では売られていない。第３章で述べたホー・ヴァン・イェム氏の祀る竈神を信仰する人々のための神像を製作している。神像の大きさは、11.5cm 横×10.5cm 縦、他の製作者が作るものより大きい（写真 4-16）。型には真ん中のヘソが彫られていないため、成形して型から取り出した後、やわらかいうちに円形の跡をつける。消しゴム付き鉛筆の消しゴムがなくなった後の金具の部分を活用している。

この神像を製作するきっかけとなったのは、ホー・ヴァン・イェム氏がディアリン村にやってきて、土を練っていたムオイ氏に突然、竈神の神像の型を作るように依頼したという。その型を製作したのは息子のダット氏である。型の製作についてはダット氏のところで詳しく述べる。イェム氏がムオイ氏の元を訪ねて以来、イェム氏との契約から市場で販売することはなくなり、イェム氏から注文された神像だけを作るようになった。1996 年から現在のオンタオ・クアンの神像を作っている。

イェム氏が亡くなって約 10 年になるという。今はイェム氏の妻が毎年６月に必要な個数を注文し、出来上がると受け取りに来て、シクロで何往復もする。受け取るときには、ムオイ氏の家でイェム氏の妻が何か儀式をするという。

ムオイ氏によるとイェム氏の竈神はとても不思議だという。どのように不思議なのかはよく分からないが、ムオイ氏はホー・ヴァン・イェム氏の名前と住所と複写の文字が記された『竈王日誦経』を所有している。

写真 4-16 ムオイ氏の神像　製作と型

②息子ダット氏によるオンタオ・グオイ製作

ムオイ氏の長男ダット氏は 46 歳（2016 年）、隣の村に住み彫刻を仕事としている。神像作りはしていないが、父に頼まれて神像の型を彫っている。ダット氏によると、イェム氏は最初、土製支脚を象ったオンタオ・クアンの型を依頼した。その後、竈神三柱（中央に女性、両側に男性）を象った型を製作して欲しいと依頼があったのは 1993 年である。その頃は誰も 3 柱を象った神像を作っていなかったため、試行錯誤しながらデザインを考えて型を彫っていたという。出来上がったオンタオ・グオイの型は 1994–1996 年まで使用していた。しかし、イェム氏がやはり竈神を祀るのはオンタオ・クアンの神像がいいといったため、現在より少し大きめのオンタオ・クアンの型が作られた。その後、ダット氏やムオイ氏はオンタオ・グオイの神像や型を作っておらず、ダット氏は最初に作った型を残していない。親子がオンタオ・グオイの型を使用しなくなった後、ディアリン村の神像製作者のあいだでダット氏の型を真似てオンタオ・グオイの型を作るようになったという。それが今の神像オンタオ・グオイの始まりである。

③箱型レンガ窯

ムオイ氏の窯は解体することなく、家の建物のなかに置かれている。窯の大きさは、約 107cm 幅×120cm 奥×127cm 高さである（写真 4-17②）。焼成をするときには窯のレンガとレンガのあいだに線香をさし拝礼してから始める。

④ムオイ氏の家の祭壇

竈神の祭壇は台所に作られているが、ガスコンロが置かれた台の壁ではなく、地炉の上に敷地などで祀られる庵と同じような箱型の祭壇が設置されている。そのなかには香炉、鏡と櫛、香水、花瓶、コップ、金紙、ムオイ氏が製作した神像が祀られている。

主室の中央には、観音が祀られた祭壇があり、その奥に一般的には祖先の位牌などが祀られているがムオイ氏の家にはない。観音が祀られた祭壇の奥の上段には、男性の本命神を祀る祭壇があり、三つの香炉が祀られている。ムオイ氏によると、中央は先師（Tiên sư：職業の祖先神）、祭壇からみて（中から外をみて）右は二位の土公、向かって左は三位の灶君（Táo quân）である。祭壇からみて左側の壁には女性の本命神を祀る祭壇があり、中央に王女、両側に 6 人ずつ、計 12 人の侍女が描かれた絵が祀られている。

第４節　神像の製作工程と道具　―ヴォー氏の製作を中心に―

（１）製作工程

ヴォー氏４兄弟への調査をもとに神像の製作を、a）素地作り、b）成形、c）乾燥、d）焼成、e）色付け・袋詰め、の工程で整理して以下に記し、図にあらわしている（図 4-1）。また、ゴー・ドゥク・フン氏やチュォン・ヴァン・ムオイ氏の製作についても補足がある場合は加えている。

①神像の製作と竈神

神像を作り始める前には、自分の家の竈神の祭壇に供物：花、果物、檳榔、酒などを供えて、これから竈神の神像作りを始めることを報告し拝礼する。家によっては、焼成する前に窯に線香を供えて拝礼し、それから火をつける。最後に神像をすべて作り終えたあとにも、家の竈神の祭壇に同じように供物を供え、無事に作り終えたことを感謝し挨拶をする。

自分の家の竈神に挨拶をするだけで、村や集落の亭やアム（庵）などに赴いて神像または土器の生産の祈願や感謝をすることはしていない。

②製作の流れ

a）素地作り

原料は水田から取れる粘土（đất sét ruộng）である。原料の入手方法は、西村の 2012 年の報告によると、Hoài Giang （Đồi12B）の水田主より購入しているが（西村 2012c: 281）、2013 年の聞き取りでは、ディアリン村に原料を売りにくる人たちがおり、彼らから 1 サオ（sào[4]）約 100 万ドン（2013 年調査時点で 400 ㎡、約４千円）で水田の土を購入している。しかし、原料の粘土は年々価格が上がりかなり大変である。2015 年ヴォー家では、水田の土ではなく山で採れた土を購入している。粘土には混和剤としての砂は混ぜていない（西村 2012c: 281）。

素地作りは四男ナム氏の家やフン氏の家では女性の仕事となっている。原料の粘土の山から必要な分を切り分け、粘土のなかのゴミや石を丁寧に取り除き、ネー・サット（nề sắt）と呼ばれる鉄製の糸のこを使い何度も土を切りながら柔らかくした後、足を使い捏ねていく。かなりの重労働であるが、神像作りのなかで最も重要な作業である。石やゴミなどを丁寧に取り除き、粘りが出るまでよく捏ねて柔らかくすることで、綺麗に成形ができ、焼成後も壊れにくくなる。

b）成形

成形はどこの家族も男性が行なっている。まず、竈神の神像の型に籾殻の細かい灰（tro trấu）をふる。粘土を入れたときに取りやすくするためである。粘土を型に押し込み、ここでは木製のネー（nề）（木製の糸のこ）の針金の部分で余分な土を切り取る。型を逆さまにしてトントンと叩き、成形された神像を取り出して木の台の上に置いていく。木の台に置くのは、乾燥させていく前に水分を取るためである。

型入れした粘土は型を強く叩きながら取り出す。それを何度も繰り返すため、型の素材は最

---

[4] Sào は地積の単位、北部では 360 ㎡だが、中部では 400 ㎡である（川本編 2011 詳解ベトナム語辞典:1385）。

も硬い木である鉄木（gỗ Lim）が一番好ましいが、特に材質が決まっているわけではない。

c）乾燥

天気がいいときは２日間乾燥させる。曇りや天気の悪いときは、少し長く乾燥させる。また、焼成後の窯の外側の熱を利用して神像を乾燥させることもしている。型から出したばかりの神像は、はじめ土の赤茶色をしているが乾燥すると灰色になる。

d）焼成

焼成に使用する窯は、レンガを積み上げて作られた箱型窯である。ヴォー氏は四男ナム氏以外の３兄弟は竈神の神像製作の焼成の時期にあわせて、レンガ窯を組み立て、焼成が終わると窯を解体する。そのため窯の大きさは正確には決められておらず、毎年少しずつ異なり、また窯を設置する空間の広さによっても大きさは変わる。フン氏、ムオイ氏は窯を解体することなく、1年中置かれている。窯については後述する。

焼成の燃料は籾殻である。窯のなかに乾燥した竈神の神像と籾殻を交互に配置し、ドック氏は８列の12層積み上げ、ナム氏の場合は８層積み上げる。また神像と神像のあいだには粘土のかけらをはめ込み、高さやバランスを揃えている。焚き口は窯の下にあり、各面の下に２か所ずつ通風口が作られている。火を入れて籾殻に火が回り、籾殻が赤くなったら、1番上に籾殻を焼いてできた灰を敷き詰めて蓋をする。焼成は火を入れて三日間（３日３晩）、火を落として二日間、全部で五日間かける。1回に1000～1500個、少し大きめの窯では3000個の小型の神像を焼成するが、窯の大きさによって各家で個数は異なる。1か月に２回から３回ほど焼成を行なうという。焼成の時間は、ほぼどこの窯も同じである。

e）色付け・袋詰め

焼成後の竈神の神像は、オンタオ・ロンは素焼きのみ、オンタオ・クアンは素焼きのままのもの、漆を塗るもの、オンタオ・グオイは素焼き、漆、カラフルな色付けをするものの３種類がある。フエ地域の人々の家に祀られている神像は、オンタオ・クアンやオンタオ・グオイの漆が塗られた神像が多くみられたように思うが、ヴォー氏兄弟によると最近はカラフルに色付けされたオンタオ・グオイの神像が人気だという。

ヴォー氏兄弟の各家では、家族や結婚して家を出た娘や友人などが手伝いに来て、色付けの作業と、ビニール袋にシン村で生産される竈神の版画１枚とアオビン（áo binh）と呼ばれる竈神の服３枚をセットにして入れる作業をする。神像に塗る色に決まりはなく、市場で売られているマーなどの冥器を参考にして独自に色付けをしている。そのため、さまざまなヴァリエーションがある。

以前は神像だけを市場になどに卸していたが、版画なども入ったセットの方が売れることと市場のお客からの要望もあり、近年は竈神セットとして袋詰めしてから市場に卸すようになった。そこに入れるシン村の竈神の版画とアオビンは自分たちで市場に行って購入している。

フン氏の家では、竈神の製作は焼成までである。同じ集落の人が色付けする以外の多くは素焼きの竈神の神像を買い取る業者に渡すので、誰が色付けをしているのかは知らないという。また、ムオイ氏の神像は素焼きのものであり色付けはしない。

図 4-1　竈神の神像製作工程

（2）道具と箱型レンガ窯

神像を作るのに使用する道具（図 4-2）と箱型レンガ窯（写真 4-17）である。

写真				
名称	① 粘土　đất sét	② 木製の型　khuôn làm	③ 籾殻の灰　tro trấu	臍を作るためのもの　làm rốn
原料	水田の土（現在は山の土）	写真：鉄木（gỗ lim）	籾殻	ペン、鉛筆
用途		粘土を入れて、神像を成形。 型の原料は、タラウマ、パドウクなど	型のなかに籾殻の灰をいれ、 幕を張り、 粘土を取り出しやすくする。	ペンなどの頭冠部分（円形）を 利用して、 臍の印をつけるもの。

写真			
名称	④ 糸鋸（大）　nề sắt	糸鋸　nề	溝入りの台　gạch để ráo nước
原料	鉄製	木製	レンガ
用途	先の部分に針金がはられている。 素地作りで粘土を切るのに使用	先の部分に針金がはられている。 型に入れた余分な粘土をカットするときに使用。	型から取り出したばかりの神像を置く台。 乾燥前に水分を飛ばすために溝をつくる。

図 4-2 神像製作の道具

① ゴー・ドゥク・フン氏とホアン・ティ・トゥ氏の窯 約120cm幅 × 123cm奥 × 91cm高さ 上：焼成休止中の窯　下：焼成開始　窯の隅に線香	② チュオン・ヴァン・ムオイ氏の窯 約107cm幅×120cm奥 × 127cm高さ 上：窯の中の様子　下：焼成前に線香に火を灯す	③ ヴォー・ヴァン・ドック氏の窯 約120cm幅×100cm奥×100cm高さ 上：焼成直後の様子　下：窯を解体後の様子

写真 4-17　箱型レンガ窯